

Ⅱサムエル 13 章「沈黙する罪」

たとえば子どもに注意すべきだと思えることがあっても、それが自分自身にも返ってくることを自覚していると、十分に注意できないということがあります。

ダビデは神の御前に自分の罪を告白しました。悔い改める者を神は赦してくださる、ダビデに与えた契約を守られるのです。ただし、「見よ、わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす」と言われていました。そのことが 13 章から記されています。

1. アムノンとタマル（：1～22）

アムノンは母親の違う妹タマルに恋をしたということです。律法によって近親相姦は禁じられていましたから、アムノンは「彼女に何かをするということとはとてもできない」と思っていました。けれども、彼は自分の情欲を募らせ、「病気になるほどであった」というのです。決してタマルを愛していたのではなく、自己中心な情欲でした。

そんな罪人にサタンは働きかけ、誘惑します。3 節。「知恵のある」ということばは、「抜け目ない」とか「ずる賢い」という否定的な意味でも使われます。ヨナダブはアムノンがやつれていく様子に気づいて、話を聞きます。それを聞いたヨナダブは悪知恵を働かせます。彼の思いを満足させるような提案をします。仮病を使い、ダビデが見舞いに来たら、タマルを来させて、病人食を作らせて欲しいと願ったらよいという提案です。

ここにサタンの誘惑があったと思います。私たちは、自分の思いが良くないと分かっている、罪ではないと思いつく理由を得て、誘惑に負けてしまうことがあります。アムノンはその提案通りにします。ダビデは何も疑問に思わずにタマルに伝え、タマルは当然ながら父のことばに従いました。

タマルは兄アムノンの病気を心配し、彼の家に行き、病人食を作り、それをよそって出しましたが、アムノンは食べようとしません。アムノンは皆を出て行かせ、タマルに食事を寝室に運ぶように言います。そして、二人きりになったところでアムノンはタマルを捕まえて、「妹よ、おいで。私と寝よう」と言います。

タマルは必死に兄の罪を止めようとします。12～13 節。律法によって禁じられているとイスラエルの誰もが知っていることです。愚かなことです。しかも、律法に従って民をさばく王の家族の中で罪が犯されたら、その問題をどこに持って行ったら良いのでしょうか。家族の問題だけでなく、国全体に悪影響があります。一旦落ち着いて、「王に話してください」と求めます。

しかし、14 節。アムノンは情欲のままに強姦と近親相姦の罪を犯してしまいました。彼の内から出てきたことです。「人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます」（ヤコブ 1:14-15）。このみことばで言われているような誘惑に対する弱さや罪の現実が私たちにもあります。早い時点で誘惑から離れなければなりません。

悲劇はそれだけではありませんでした。欲望を満たした途端、アムノンはタマルを嫌悪し、憎み、追い出したのです。15 節。人は罪を犯した後に深い自己嫌悪に陥ります。アムノンの自分自身に対する嫌悪がタマルに向けられたのです。アムノンにとってタマルは自分の罪の証拠を示す存在でしかなくなります。

タマルは抗議します。その言葉も律法に基づいています。申命記 22：28～29。タマルの人生を台無しにしたアムノンには、この定め通りに彼女にする責任がありました。しかし、彼はその抗議のことばを聞こうとせず、召使いに命じて、タマルを追い出して、戸を閉めさせました。アムノンはここではタマルを「この女」と言っています。軽蔑的な意味が込められています。まるでタマルが悪かったと言わんばかりです。

結局、明らかになったのは、アムノンにとって大切なのはタマルではなかったということです。アムノンはタマルに恋をしましたが、愛したのではなかったのです。自分が大切で、自分を愛し、自己中心だったのです。

I コリント 13 章にある愛についての有名な教えの中に、「愛は…礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず…」とあります。そのような愛を持ちたいものです。

身も心も傷つけられ、捨てられ、人生を台無しにされたタマルの悲しみや屈辱はどれほどでしょう。泣き叫びながら帰っていきました。タマルと同じ母の子、兄のアブサロムは彼女を保護します。けれども、彼女に「今は黙っていなさい」と言います。訴えずに黙っていたほうが楽だからかもしれません。それと共に、アブサロムはアムノンに対する怒りを持ち続け、いつか復讐しようと心に決め、復讐のためにその思いを隠したのでし

よう。22 節。

一方ダビデも、激しく怒りました。21 節。「ダビデ王は」と言われています。「事の一部始終を聞い」た王としては、当事者を呼び出し、さばきを行わなければなりません。また、父親としても、子どもたちに対して公正に接する必要があります。けれども、ダビデは何もしませんでした。

おそらく、ダビデは自分自身のバテ・シェバとの罪があったので、行動を起こす勇気と判断が鈍ったのでしょう。彼は確かに神の御前に真に悔い改め、罪の赦しをいただいていたいました。けれども、アムノンの罪を取り扱うことは、自分の罪に触れることになるので、王としてまた親としての務めを果たせませんでした。

こうしてアブサロムもダビデも沈黙して、タマルの絶望的な悲しみはそのままにされました。罪に対して沈黙する罪があることを思います。怒りを内に秘めて復讐心を大きくすることがあります。あるいは、指導する必要を認めながらも、指導力と愛の欠如を痛感させられることがあります。自らが罪を取り扱われ、神の愛と知恵をいただかなければなりません。

2. アブサロムの復讐と逃亡（：23～39）

こうして、アムノンの罪に対して何の対処もされずに「満二年」が過ぎました。その間にアブサロムはアムノンに対する復讐計画を練っていました。また、アムノンはダビデの長男で、アブサロムは三男ですが、次男は若くして亡くなったと考えられています。アブサロムはアムノンに次ぐ王位継承者です。その野心も育っていました。そして、アムノンが犯した罪を思えば、復讐を果たして自分が王位継承者になることに対する良心の咎めが薄れます。

ついにアブサロムは復讐計画を実行に移します。羊の毛の刈り取りの祝宴を開き、そこに王の息子たち全員を招きました。アブサロムはまずダビデ王のもとに行き、祝宴に招待しました。ダビデにはタマルのことで負い目があるので、おそらく招待を断るだろうと予想していたのでしょう。ダビデが断ると、アブサロムは王の代わりにアムノンを行かせてくださいと頼みました。そこでダビデに疑念が生じたのでしょう。それで、息子たち全員を行かせるということでダビデは承諾しました。その祝宴の裏では、アブサロムがしもべたちに、アムノンの殺害を命じていました。ついに祝宴の最中に、しもべたちは命令通りにアムノンを殺しました。

復讐を遂げたアブサロムは「ゲシュルの王アミフデの子タルマイのところ」に逃げました。ゲシュルは母親の出身地であり、タルマイは祖父です。そこならば自分をかくまってくれると思ったのでしょう。

この重大な事件に対してダビデはどうしたのでしょうか。ここでもダビデは嘆き悲しむだけで、アブサロムに対して何もしていません。そして、そのまま3年が経ったということです。

自分の息子たちの間で殺人事件が起こり、長男アムノンが死んだということはもちろん大きな悲しみです。でも、悲しむだけでなく、殺害を指示したアブサロムに対して正義を行うべきです。けれども、その原因となったアムノンの罪を知っていながら、何も対処してこなかったという負い目がダビデにはあったでしょう。さらに、アムノンの罪に対処できなかったことには、自分自身の罪の負い目があったでしょう。そのような中で、ダビデは身動きが取れない状態になってしまいました。

難しい状況の中で自分が行動すべきと思いつつ、行動できなかったこともあります。どうしたらふさわしい行動をすることができるのだろうと悩みます。しかし思わされるのは、私たちは神、主を恐れるべきであり、主が願っておられることを選ぶべきであるということです。罪の事実を放っておいてはいけなし、自分を守るのではなく、当事者のためになすべきことを選ぶようにと思います。

この箇所から教えられる一つは、罪の誘惑から早い段階で離れることです。私たちは、自分の思いが良くないと分かっているのに、罪ではないと思い込む理由を得て、誘惑に負けてしまうことがあります。それぞれに弱さがあり、サタンは巧妙に大したことではないと思わせようとします。しかし、「欲がはらんで罪を生む」前に、早い段階で誘惑から離れるようにしましょう。自分の弱さをわきまえつつ、主の助けを切に求めましょう。

もう一つは、罪に対して沈黙することも罪ですから、主の願っておられることを選び、対処することです。そのためには、自分自身が罪を取り扱われている必要があります。そして、神の愛と知恵をいただいて当事者に接しなければなりません。自分を守ろうとするのではなく、当事者のためになすべきことを選びましょう。私たちは主を恐れ、主が願っておられることを選ぶことができるように祈りましょう。